



テレジンからの命のメッセージ
アウシュヴィッツに消えた子どもたち

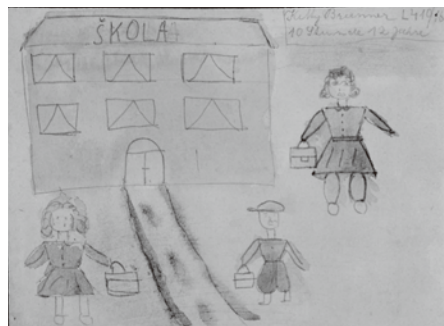
テレジン収容所の 小さな画家たち展



収容所入り口

テレジン収容所

1941年、ナチス・ドイツが、占領下においたチェコスロバキア（当時）の首都・プラハから北へ60キロほど離れた小さな街・テレジンに作った収容所。当時はTheresienstadt（テレジエンシュタット）とドイツ語で呼ばれ、アウシュヴィッツへの中継地という役割を果たし「地獄の控え室」と呼ばれていました。14万4000人のユダヤ人が収容され、その四分の一に近い3万3000人がこの町で、飢えと病気と悲惨な生活のため死亡し、8万8000人がアウシュヴィッツをはじめとする絶滅収容所へ送られました。また、テレジンには1万5000人も子どもたちが収容されていました。



キティ・ブルネロヴァー（女）1931年12月26日生まれ
1944年5月18日アウシュヴィッツへ



ハナ・カリホヴァー（女）1931年11月13日生まれ
1944年5月15日アウシュヴィッツへ

<表絵> ドリス・ワイゼロヴァー（女）1932年5月17日生まれ 1944年10月4日アウシュヴィッツへ

2011年 10月18日（火）-23日（日）

茨城県つくば美術館（つくば市吾妻2-8） 入場無料

時間▷9:30~17:00（入場16:30）*最終日は15:00まで

テレジン収容所には、15,000人のユダヤ人の子ども達がありました。空腹ときびしい労働で疲れはてた子ども達のたった一つの楽しみは、ひそかに絵を描くこと。遊園地やサーカスの思い出、花や蝶、小さい画家達は何でも絵にしました。しかし、この子ども達のほとんどはアウシュヴィッツに送られ、ガス室で殺されたのです。生き残ったのはわずか100人でした。

1945年、テレジン収容所が解放された時、生き残った世話人が子ども達の絵をすべてトランクにつめて持ち出し、プラハのユダヤ人協会に届けました。届けられたのは、4,000枚の絵と、数10枚の詩の原稿でした。たった1枚の絵だけを残して、幼い命をうばわれた子ども達は、戦争のおろかさ、大切な命を虫けらのようにつぶした「力」への怒り…そして、生きて絵を描けることの幸せ、生命の大切さを、今、生きている人々に語りかけています。

作家の野村路子さんは、この絵を日本の子ども達に見てもらいたいと、チェコから譲り受け、1991年から日本の各所で展覧会を開催し、テレジンの子ども達のことを伝えています。

この展覧会では、野村路子さんと、譲り受けた絵のレプリカパネルを保管している埼玉県平和資料館の協力を得て、絵と解説パネルの展示を行います。

* 野村路子：テレジンを語りつく会代表／著書「テレジンの小さな画家たち」「15000人のアンネ・フランク」「フリードルとテレジンの小さな画家たち」等。

「絵の授業は子どもたち全員を芸術家にするためのものではない。その課題は創造性や独自性といった力を解放し、広げて、想像力や現実の認識力を高め、強化することである。」

--- フリードル・ディッカー・ブランデイズ

子どもたちの絵の先生

フリードル・ディッカー・ブランデイズ（1898-1944）について

ホロコーストの犠牲となり、アウシュヴィッツでその生涯を閉じました。彼女は、オーストリアのユダヤ人家庭に生まれ育ち、バウハウスに学び、その類い稀なる創造力によって、将来を囑望された芸術家でした。しかし、残酷な時代の波は、いとも簡単に彼女をのみ込んでしまいます。投獄、国外追放、そしてテレジン収容所へ…。フリードルは収容の身となりながらも創作活動を続け、さらに死の淵に瀕した子どもたちに美術を通して“生きること”を教え続けたのです。

